「救いたい心」をつむぐコミュニケーションマガジン

# 赤十字 NEWS

11

November 2020 no.966

Japanese Red Cross Society NEWS
http://www.jrc.or.jp

令和2年11月1日（毎月1日発行）
赤十字新聞　第966号
昭和24年9月30日 第三種郵便物認可

わたしも赤十字　寄付の協力者

牛島和子（うしじま・かづこ）さん【p.4でご紹介】

## 特集

### コロナ禍 心のクライシス

# よう生きててくれたなぁ。

人間を救うのは、人間だ。

日本赤十字社
Japanese Red Cross Society

YouTube

赤十字新聞　編集・発行／日本赤十字社 広報室　〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3　TEL：03-3438-1311　一部20円　赤十字新聞の購読料は会費に含まれています。

令和2年11月1日（毎月1日発行） 第966号（昭和24年9月30日 第三種郵便物認可）

コロナ禍
心のクライシス

# よう生きてくれたなあ。

**新型コロナウイルス感染症の流行下で心理的な不安・負担が高まり、全国的に自殺者数の増加が報道されています。強い「心配」や「不安」を抱え、たった一人で苦しみ、自ら命を絶とうとする人にどう寄り添えるか…。自死を防ぐため、独自の活動を続ける日赤和歌山医療センターの精神科・東睦広医師にお話を伺いました。**

日赤和歌山医療センター　精神科部長
東睦広（ひがし・むつひろ）　医師

## 「ゲートキーパー（命の番人）」を増やすために

社会全体を覆う不安や、多くの人の中で高まる心理的負荷。精神科の東医師は、新型コロナウイルス感染症によって社会に広がっている風潮を心配しています。

「もともと不安を感じやすい人にとって、今の社会状況は相当きつく感じられるでしょう。自分も感染するかもしれない、感染して周りに迷惑を掛けたくない、そんなことを考え続けて、不安が大きくなって、押しつぶされそうに思えてくる。こういう人は、全国にたくさんいると思う」

東医師はこれまで数多くの「うつ病」患者と対話を重ねてきました。不安や無気力にさいなまれる「うつ病」を患い、さらに新型コロナウイルスのような大きなストレスで生活の維持が困難になると、自ら命を絶つことも選択せざるを得ない気持ちが出てきます（希死念慮）。先生は病院での治療とは別に、生きることに絶望し苦しんでいる人々のためにさまざまな活動を続けています。その1つが和歌山市にあるFM877（FM和歌山）で月～金曜に放送されている10分番組「こころの病を知ろう」のプロデュースです。その番組では、精神疾患の症状を理解し、その苦しみに共感できる人が増えること、そしてリスナーが近くにいる人のSOSに気付き、自死を防ぐ「ゲートキーパー（命の番人）」になってくれることを願って、10年以上も番組を続けています。

自殺を図って病院に搬送された患者と対面したとき、どんな気持ちで診察しますか、と聞いたところ東医師は、「ようココ（病院）に、生きてたどり着いてくれたなあ！ ほんまにありがとう！…という気持ちですねえ。死なないでいてくれた、命があるうちに病院に来てくれた…ヨシッ、この人は助かるぞ！ってね」

自殺を図り救命される人は、実はあまり多くないのです。だから医師や医療関係者にとっては、生きてさえいてくれたら、寄り添っていける“チャンス”なのだ、と。

体が回復した患者は、たとえ希死念慮が残っていても帰宅します。そのため、東医師は病院外でもNPOを立ち上げ、「ゲートキーパー」を養成する活動に取り組んでいます。少人数で始めた活動が、10年続ける中で他のNPO団体や行政機関と協力し合うことも増え、活動の輪も幅も広がってきた、とのこと。そしてゲートキーパーの支援を受けた人から「今になったら、あのとき助かってよかった」「自分の周りにも、やさしい人がおったんやなって気づけた」「しんどいときは、しんどいって言ったら、いいんだよって、何度も言うてくれたから」と、それぞれのゲートキーパーとの出会いを聞くたびに、東医師は「やっぱり必要な活動だ。続けていこう」と思いを新たにするそうです。

「人の苦しみを理解しようとして寄り添っていく姿勢は、ゲートキーパーになろうとする人も、赤十字の活動をする人も共通の思いがあるように感じます。だから、周囲には私の思いを理解して、そっと支えてくれている人が多いですね。感謝しています」（東医師）

■精神科との連携 ～“産後うつ”に向き合う産婦人科医師の言葉～

## コロナ禍の「産後うつ」。孤立させず、周りが支えていければ

日赤和歌山医療センター　産婦人科副部長
横山玲子　医師

コロナ禍で「マタニティーブルー」を悪化させる人が増えている印象はあります。

出産後に「マタニティーブルー」になる人は全体の10%くらい。出産後は急激なホルモンバランスの変化、環境の変化などにより誰にでも起こり得ますが、最近は出産前から「マタニティーブルー」になる人も増えてきたように感じます。以前は両親学級、マタニティーヨガなどが開催され、ママ友に相談したり、助産師に悩みを話すなどの機会もありました。それが今は、ほとんど全て中止。さらに出産の立ち会い制限や入院中も家族との面会が制限されていますから、一人で不安をつのらせ、そのまま退院後に症状が進行するケースも。

「マタニティーブルー」は一時的で、長くても2カ月くらいで回復しますが、症状が長引くと「産後うつ」という精神疾患に。これは、周囲から手助けしてもらえないなどの環境も悪化の一因です。コロナ禍で身内や友人からの支援が受けられず孤立している人は、注意が必要な状況といえます。

当産婦人科では産後に注意が必要な人の情報を保健所や小児科に引き継ぎ、乳幼児の検診や予防接種時の様子を共有して、できる限りのサポートを心がけます。そこで症状があれば臨床心理士や精神科に引き継ぐことも。新型コロナの不安が続く中、オンライン相談など新しい妊産婦のケアを模索していく必要性を感じています。

第966号（昭和24年9月30日 第三種郵便物認可） 令和2年11月1日（毎月1日発行）


## 「生きることがつらい人に、気づける人でありたい」

東医師は、目に見えない心のダメージを軽く考えることに警鐘を鳴らします。「うつ病は、脳の機能が低下したり、神経伝達に必要なカテコールアミンというたんぱく質のバランスがくずれるなど、健康な脳と決定的な違いがある。なのに、甘えたらあかんとうつ病の人を責める風潮がある。脳が正しく働かなくなる病気なんだ、と多くの人に理解してほしい」

ほとんどの場合、初期段階では本人ですら自分に起きている「異変」に気づけません。だからこそ、「うつ病」などの精神疾患の可能性があることに周りが気づき、話を聞こうとする姿勢が重要です。不眠や食欲不振などの身体症状に苦しみ、精神疾患の治療を受けずに悪化させるケースも多いとのこと。東医師は、精神科医一人の力では、決して命を助けることはできない…、と前置きし、「死しか自分を楽にできない、と思い込んでいる人も、できれば生きていたいんや。そういう人の発せられない声をキャッチするゲートキーパーが、病院の中だけでなくいろんな場所や職業の中にいてくれたら、みんなが生きていたいと思える社会が形成されていく」

東医師が立ち上げたNPOでは、オンラインでの「ゲートキーパー」養成講座も行っていくとのこと。NPOのメンバーの中には、自殺未遂をした後、苦しんだからこそ孤独や痛みがわかる、と自らゲートキーパーになって活動する人も。病院の中でも外でも、東医師の熱い思いは広がっています。

自殺未遂の患者が集中治療室（ICU）に入院しているときから、ICU医師（右・是枝大輔医師）、精神科医師（中央・東医師）、社会福祉士などが協議を行う。「外科や内科で体は治せても、心は治せない。その領域は、東先生に判断を仰ぎます」と是枝医師は話します

## 「ゲートキーパーの種をまく、先生とのラジオ番組」

ラジオパーソナリティー
**宇和千夏さん**

FM877（FM和歌山）で東医師との番組を10年以上続けている宇和さん。東医師のゲートキーパー養成講座を受講し、実際に苦悩を抱える方の相談に乗ったときのことを振り返ります。「ゲートキーパーは聞き役に徹してアドバイスをしない。自分の考えを押し付けることになるので。だから最初は、本当にこの人の助けになっているのかな、って心配になって。でも、悩みに気づいて話を聞くだけでもその人の力になると信じて相談に乗ります。“どうしたらこの苦しみから解放されるの？”…そう悩む人には『私も正解は分からないけれど、一緒に考えるよ』と寄り添います。これは東先生に教わった言葉です。

FM877で複数の番組を担当していますが、コロナ禍で外出自粛が続いていたとき、自宅に機材を持ち込んで生放送を続けました。いつもの時間に、いつもと同じ声を届けたかったから。リスナーからは『家を出られず苦しかったけれど、生放送で声が聴けて元気をもらった』という感想が。やっぱり人って苦しいときに孤独になっちゃダメですよね。東先生は、ラジオで心の病への理解を浸透させてゲートキーパーを育てようとしていますが、こんなときだからこそ、声で寄り添えるラジオを続けるのは正解なんだ、って思います」

FM877のスタジオで「こころの病を知ろう」の収録を行う東医師と宇和さん（右）

● FM877で放送される東医師と宇和さんの番組
「こころの病を知ろう」はインターネットラジオでも聴けます。
（月水金は21:24～、火木は16:24～）⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒

● 厚生労働省は自死を減らす取り組みとして
「ゲートキーパー」の育成を推奨し、研修用テキストやガイドブックを
公開しています。詳しくはこちら ⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒

■精神科との連携 ～“自殺未遂”に向き合う救急外来医師の言葉～

## どうしたら病院に来る前に救えるか？「治療」は院外で始まっている

日赤和歌山医療センター　第一救急科部長
浜崎俊明　医師

コロナ禍で自殺者が増えてきたという報道もありますが、当院の救急外来ではあまり感じていません。地方は、一人暮らしよりも家族で暮らされている人が多く、近所に血縁者がいるなど、コロナ禍でも孤独になりにくい。都会に比べると周りと距離が近く援助を求めやすいのかもれません。大都市だと、人は多いけれど関係性が希薄になりがちです。孤立・孤独が続けば、強い不安や心理的ダメージから立ち直ることができず、精神疾患の引き金になってしまうこともあるでしょう。

当院の救急外来に自死関連で運び込まれる人は多くありませんが、助かっても、まだ「死にたい」と言う人がいます。そういう患者さんを精神科の東先生に診ていただいたり、社会福祉士に相談したりしています。救急で処置が終わっても、その人の心の苦しみまで治せるわけではない。その人が生きていくための治療は、そこから始まります。

どんな病気でも、悪くなる前に手を打つのが最善の対策だと考え、私は、ある政令都市での医療施策に携わったことがあります。自死を考えるほど病気が進行して病院に運び込まれる前に、本人も周囲も変調に気づき、助けていく。そのためには、保健所など行政機関との連携も重要です。病院の外にいる人とつながり、支えていく、という東先生の活動を見ていると、理念は同じだと感じます。

TOPICS

# 「赤十字救急法」と迅速な行動が同僚の命を救った！

**新型コロナウイルス感染拡大防止のため休止していた日本赤十字社の救急法の講習が、感染予防策に配慮しながら再開しつつあります。今回は、コロナ禍の今年7月、「一次救命処置」によって命をつないだ福岡県の実例を紹介します。**

日本赤十字社九州ブロック血液センターで勤務中に心肺停止で倒れた職員Yさんを、同センターの６人の職員が見事な連携プレーで無事救命しました。

血液製剤などを製造し、九州全域に供給する同センターでYさんが勤務するのは夜間の需給管理課の作業室。Yさんが倒れたのは、出勤してすぐの17時ごろのことでした。

同センターの熊本貴志さんが事務棟から駆けつけたところ、すでにそこにいた職員たちが消防へ連絡、AEDの準備、気道確保などの一次救命処置を行っていました。さらに赤十字救急法指導員の資格を持つ熊本さんが、胸骨圧迫を実施。倒れてから約10分後に救急車が到着するまで胸骨圧迫を交代しながら継続するなどスムーズな連携がなされました。

「心肺停止から５分たつと生存率が大幅に減少、あるいは後遺症が残る危険性があるため、一次救命処置は何より重要。年１回、職員を対象に開催している赤十字救急法の講習が生きた形になりました」（熊本さん）

Yさんが病院で意識を回復したのは１週間後のこと。心臓ペースメーカーを取り付ける手術を行いましたが、後遺症もなく術後の経過は順調。11月には職場復帰の予定となっています。もともと軽度の不整脈で月１回、主治医にかかっていたYさんですが、心肺停止にまで陥ったのはこれが初めてのことだったそうです。

「私も救命講習は受けてきましたが、まさか自分が救命していただく立場になるとは――。仲間には本当に感謝するとともに、誰にでも身近に起こることと認識し、自分が救命する立場になったときにはためらわず行動したいと改めて思いを強くしました」（Yさん）

なお６人の職員は全員、実際に倒れた方に処置をするのは初めてのことでしたが、「冷静に状況を判断し、即座に行動できたのは反復して講習を受けてきたことが大きい。今後も年１回は参加しておきたいと職員と話し合っています」と熊本さんは継続の重要性を振り返ります。

新型コロナウイルス感染防止を徹底するため一時期は休止していた講習ですが、現在は「会場の十分な換気を行う」「人と人が接触する実技は行わない」などの実施要件を定めて一部の支部で再開しています。同センターの職員たちのように、救命する側にも救命される側にもなり得る可能性は誰にでもあり得ます。ぜひ命を救う鎖をつなぐ１人になりましょう。

※講習の実施状況は各都道府県の日赤支部にお問い合わせください。

AEDを手に、当時を振り返る熊本さん

救命処置にあたった（左から）上瀧啓二さん、櫻木美緒さん、白川正史さん、黒田千重美さん、熊本貴志さん、小宮直美さんには、久留米消防署から感謝状が贈られました

TOPICS

# 視覚障害のある子どもに楽しく学べる防災教材を

**南海トラフ地震の課題を抱えた和歌山県では防災教育に力を入れています。日赤和歌山県支部と特殊赤十字奉仕団は、視覚障害のある子どもたちに地震発生時の様子や危険な場所、正しい行動を楽しく学んでもらうための防災教材を制作しました。**

和歌山県障害者支援赤十字奉仕団（通称：拡大写本グループあかり）が「触って学べる」防災教材を作成し、県立和歌山盲学校に寄贈しました。

日本赤十字社では幼児向け防災教材「きけんはっけん！」を多くの幼稚園や小学校に無償提供しています。ところが視覚障害のある子どもたち向けの防災教材は少ない――。そんな課題に気が付いた和歌山県支部が、グループあかりに相談して企画したのが、立体模型による防災教材です。

教室を再現した立体模型には、ミニチュアの椅子や机などを設置。手で揺らすと時計が落ちたり、棚から本が飛び出したりする仕掛けになっています。グループあかりの榎純子委員長は、「動かすものなので頑丈で、それでいて触っても安全な素材を慎重に選びました」と制作を振り返ります。

細部にわたって教室を再現した模型の中でも、盲学校の寄宿舎指導員・南尚樹さんが感心したのがブリキのハサミが置かれていることでした。「避難するときに床にハサミが落ちていたら危ないことが、視覚障害のある子どもにもわかりやすい。この教材で学び、『普段からハサミの置き場所を考えるようになった』という生徒もいました」と教材の効果を解説します。

立体模型には生徒を模した人形も設置。榎委員長は「地震の危険を伝えるのが目的でも、なるべく楽しんで学んでもらいたい」と手触りや表情、洋服にも工夫を凝らしたことを語ります。生徒たちもそのかわいらしさに大喜び。人形を手に取って、「机の下に隠れなきゃ」「ここにいると危ないね」などと遊びながら災害時の疑似体験をして学んでいるとのこと。

南さんは「地震が起きた後、出口前に障害物が倒れているとか、棚から物が落ちているとか、この模型で想像することができる。恐怖を植え付けずに、安全に逃げる方法が学べるんです。あかりさんは視覚障害のある子どもたちの気持ちをとても理解されている」と教材提供への感謝を語りました。

拡大写本グループあかりは昭和53年に活動を開始。現在は11人のメンバーが視覚障害を持つ子どもたちが触って遊べる遊具や手指の訓練の手助けになる教材を制作、盲学校や図書館に寄贈している。また和歌山県支部からの依頼で救急法の蘇生人形の服や着ぐるみ、人形などの作成にも取り組んでいる。（左写真が榎委員長）

実際に教材を体験する盲学校の生徒。同奉仕団は、これまでに多くの人形や、立体の布絵本、物語のタペストリーなどの制作・修繕を行ってきた。その過程で集積されたノウハウが、存分に生かされた立体模型による防災教材となった

## わたしも赤十字　今月の表紙

**赤十字にはさまざまな形で赤十字の活動に参加する支援者がいます。
全国の支援者の中から毎月お一人を、温かいメッセージと共にご紹介します。**

寄付の協力者

牛島和子（うしじま・かづこ）さん

埼玉県さいたま市／76歳／会社役員

### 分け隔てなく人を助ける日赤を応援したい

私は働き始めた頃から少しづつ寄付をしてきました。10年ほど前、ちょうど東日本大震災の頃に新しい会社を設立したのを機に、毎年まとまったお金を日赤へ寄付させていただくようになりました。私の周囲にはこういった寄付をする人が多いのです。主人の祖父は長崎で被爆後に自分で作ったお米を背負って列車で街へ運んでは困っている人や子どもに分け与えていたような人でした。私はお茶の販売などいくつかの事業をやっていますが、今も元気で働けているのは、「おかげさまで」、という感謝の思いがあり、働いて得たお金で少しでもお役に立てればと考えています。

ニュースなどで赤十字のマークをつけた方が活動されている姿を見ると、寄付が役に立っているな…と。コロナで横浜のクルーズ船に入っていく姿も映っていましたね。大変だけど頑張ってほしいという気持ちで見守っていました。

全国赤十字大会などの行事に参加して他の支援者の方とお会いするのも楽しみでしたが、今年は中止になって残念でした。また集まれる日が早く戻ってほしい。自分にできることとして絶対に感染しないよう気をつけています。

寄付するあなたも
赤十字です

日本赤十字社への
ご寄付の方法

クレジットカードで寄付

CREDIT CARD

Web サイトからの登録により、クレジットカードでご寄付いただけます。ご寄付の方法は、毎年・毎月・今回のみからお選びいただけます。

身近な窓口から寄付

BANK

■郵便局・銀行の口座振替
■郵便局・銀行の窓口
■お近くの日本赤十字社窓口

詳しくはこちら→

日本赤十字社　寄付　検索

donate.jrc.or.jp/lp/

3.11 あれから10年を生きて

# 銀行員（バンカー）から看護師（ナース）へ。命を支える仕事がしたい

**第８回** 東日本大震災の発生から2021年3月で10年。
来年の3月号まで「3.11」から人生を変えた人々の物語を毎月連載します。

仙台赤十字病院　看護師　菊地瑞穂（きくちみずほ）さん

「一体、私は何しているの？ 山の向こうは大変なことになっているのに！」

３月14日。月曜の朝から“自分への不満”で心がいっぱいになりながら、私は銀行の担当業務に追われていました。３月11日、金曜の金融市場が閉まる直前に発生した大地震と停電によって、私の勤める銀行でも取引のデータが消失し、損失が発生していました。土日で停電は復旧したものの、月曜は朝から混乱した状況で、顧客のクレーム対応を行う同僚もおり、私自身は金融商品取引の事故処理に追われていました。しかし…岩手・宮城・福島では、町ごと流され、多くの人が亡くなったのです。つらい思いをしている人が、今この瞬間もたくさんいるのです…。お金に振り回され、人として、やるべきことをやれていない自分のことが、腹立たしくて仕方がありませんでした。

生まれ育った山形で、地元の国立大を出て、県内の銀行に就職し５年。震災が起こる前から、自分の仕事にもやもやした思いを感じていました。日頃抑えていた思いの反動のように、私はすぐにでも被災地へボランティアに行ける方法を探し、県内にいる災害ボランティアとコンタクトをとり、その方に付いて山形から宮城の被災地に通いました。その後、GWに仙台で震災ボランティアの会議があると聞き、仲間と参加。そこで初めて、日赤の医療救護班を知りました。

石巻看護の在学中、「学校祭」で子どもたちと触れ合う菊地さん（左）

被災地の話をされていたのは赤い救護服を着た日赤の看護師さん。私の手には配られた「こころのケア」ハンドブック。看護師さんの「これからは被災者の心をどうケアしていくかが課題…」という言葉に、私の心は揺さぶられました。お金より、命だ。命に、人に、関われる仕事がここにある。

銀行を辞めて日赤の看護師になろう。数カ月ほど悩んで出した結論です。一時の高揚で決めてはだめ、冷静になれ、と自分を戒めましたが…人と濃く関わり、命を支え、災害があれば被災地にも行って人を助けられる看護師の仕事がしたい、その一心で決めました。そして2012年４月、被災してプレハブの仮校舎で授業を再開した石巻赤十字看護専門学校（以下、石巻看護）に入学。同級生は高校を卒業したばかりの子たちか、と思いきや、40人中９人が社会人経験者。20代半ば過ぎの私も違和感なく溶け込めました。

石巻を選んだのは、被災地に住むことで復興にも携わりたいと思ったからです。プレハブ校舎は、夏は暑すぎ、冬は水道管が凍って演習ができないなど大変な状況でしたが、先輩たちの被災経験を聞くと、石巻看護に入学できてよかったと思いました。震災当時、看護学生たちは、自分たちも被災者でありながら、学校に逃げてきた地域の方々のケアに全力を尽くしました。過酷な数週間を乗り切った10代の子たちの精神力に驚かされます。石巻看護の教員の言葉で、今でも記憶に残っているのは「災害直後だから、看護師になりたいと思ったのかもしれない。でも看護師の仕事って、下（しも）の世話とか、すてきじゃない仕事がほとんどなの」という言葉。実際、看護師の仕事はその通りですが、だからって、辞めたいなんて思いません。あの災害をきっかけにして、命を支える仕事の素晴らしさに気づけました。決して楽な仕事ではありませんが、これからもずっと、看護師を続けていきたいと思っています。

令和2年11月1日（毎月1日発行） 第966号（昭和24年9月30日 第三種郵便物認可）
第966号（昭和24年9月30日 第三種郵便物認可） 令和2年11月1日（毎月1日発行）


# AREA NEWS

全国各地
あなたの生活のすぐそばで
日本赤十字社の活動は
行われています。

## 秋田県 子どもの未来を共に育てる“里親制度”を知ってください

毎年10月は「里親月間」です。秋田赤十字乳児院は里親制度の理解を広めるため、オリジナル動画をネットで公開しました。秋田県内の里親委託率は、全国46位・13.2%（2019年度末現在）という低水準。公開中の動画の中では「子どもたちがより自分らしくできる場所が里親家庭です」などのメッセージとともに、里親の期間や養育費といった具体的な疑問にも回答しています。

子どもたちの未来のために。メッセージを発信する石川明子院長

## 茨城県 地域コミュニティ誌、無償で10年「掲載」という形で赤十字を応援

日赤茨城県支部は9月10日、赤十字活動への応援を長年続けている茨城弘報株式会社を表彰しました。同社発行のフリーマガジン「月刊ぶらざ（県央版）」では同支部から情報提供を受け、いのちと健康を守るために役立つ情報を10年以上にわたり毎月無償で掲載。同社の大平勝典社長は「今後も社会貢献として赤十字の活動を多くの方に届けたい」とコメントしました。

茨城県支部の記事提供で救急法講習の案内などを掲載

## 大阪府 どうする？ 非常事態での発電 燃料供給を含む協定を締結

９月28日、日赤大阪府支部とエネアース株式会社は非常用発電に必要な重油の供給に係る「災害支援協定」を締結しました。この協定は、地震・津波・暴風・豪雨などで支部や大阪赤十字病院、高槻赤十字病院が被災するという非常事態を想定したもの。協定で定められた支援によって、非常用発電システムへの円滑な燃料供給の実現と、安定した事業の継続を目指しています。

大阪府支部内の非常用発電システムをエネアースの担当者が確認

## 沖縄県 コロナ禍の沖縄を守れ！ 県の対策本部に職員を派遣

日赤沖縄県支部は、沖縄県新型コロナウイルス感染症対策本部からの要請に基づき、他機関に先駆けて支援要員を同本部に派遣しました。対策本部では各医療機関、厚労省、自衛隊、海上保安庁、DMATなどと共に業務支援にあたり、自宅療養者のためのコールセンターの体制構築や重症者などの入院調整業務などに支部の職員が尽力しました。

対策本部では海上保安庁や自衛隊などと連携して活動

## 常任理事会開催報告

令和２年10月22日、令和２年度第４回の常任理事会が開催されました。

1 独立行政法人 福祉医療機構からの運転資金長期借入金の個別借入について（日本赤十字社医療センターほか14施設）
2 金融機関からの運転資金長期借入金の一括借入について（本社）

審議の結果、日本赤十字社医療センターを除く14施設にかかる福祉医療機構からの個別借入については原案のとおり議決され、同機構からの日本赤十字社医療センターの借入および金融機関からの一括借入については、原案のとおり理事会に付議することが了承されました。

また、伊達赤十字看護専門学校の閉校、最近の主な国際活動、予算の補正にかかる社長専決事項について、それぞれ報告しました。

※オンラインでの開催となりました。

## 愛知県 東海豪雨の体験談から「未来に備える」特集記事を公開

2000年9月に発生し、愛知県下では６万棟を超える建物が浸水した大規模水害から20年。日赤愛知県支部のホームページでは特集記事を公開しています。堤防を決壊させた水はどのように街に迫ったか？ 避難所の課題は？ ボランティアの活動は？ など今後の災害にも役立つ防災のヒントが語られているほか、コロナ禍における避難のポイントなども併せて紹介しています。

発災当時、浸水被害の現場へボートで向かう日赤救護班

## 全国 「救急の日」&「世界救急法の日」は全国でイベントがめじろ押し！ サッカーのスタジアムなどさまざまな場所で救急法の大切さをアピール

9月9日の「救急の日」と9月の第2土曜日の「世界救急法の日」に各地でイベントなどが実施されました。

埼玉県の深谷赤十字病院で開かれたのは深谷市からの寄付金受納式。この寄付金は深谷市が製作・販売したポロシャツの売上金の一部で深谷市長から同院の院長に目録プレートが手渡されました。

日赤石川県支部は、地元プロサッカーチーム「ツエーゲン金沢」とのパートナーシップ協定に基づき、「日本赤十字社応援試合」を開催。会場に赤十字ブースを設置するなど日赤の活動をPRしました。

9月12日には日赤香川県支部が「世界救急法の日」記念イベントを実施。救命の連鎖と地域の連携に関する講演や一次救命処置のデモンストレーションを行ったほか、新型コロナウイルスを正しく知るための講演も行いました。

深谷市イメージキャラクターの「ふっかちゃん」も受納式に同席

ブースでは撮影会やAEDの使い方説明会なども

「人が倒れていたら何ができるかを考える機会になった」と参加者

## 栃木県 「世界手洗いの日」に講習会 預かる子どもたちを守るために

最もシンプルで有効な感染症対策の１つ「手洗い」。10月15日「世界手洗いの日」に、日赤栃木県支部では子育て支援団体「となりのグランマ」からの要請を受け、幼児安全法講習を実施。子どもの病気に関する講義や、手洗い指導を行いました。手を石けんで洗い、手洗いチェッカーで確認した受講者からは「しっかり洗ったつもりなのに、洗い残しが！」と驚きの声が上がりました。

感染予防の知識を得て、安心して個人託児や育児支援が行える

## 全国 子どもたちが自分たちの力で考える！ 全国で活用が広がる日赤の防災教材（9月は防災月間）

日赤では、自分の目で見て考える防災教材「ぼうさいまちがいさがし きけんはっけん！」や「まもるいのち ひろめるぼうさい」を使った防災教育に取り組んでいます。

「きけんはっけん！」は低年齢向けのイラスト教材です。９月８日、福井県青少年赤十字賛助奉仕団は福井県の常葉（ときわ）幼稚園で、また9月29日、日赤愛知県支部も名古屋柳城短期大学附属柳城幼稚園で園児22人を対象に、「きけんはっけん！」を用いた防災教室を開催し、園児たちは災害時の自分の行動を真剣に考えました。

さらに9月15日、長野県の青少年赤十字賛助奉仕団委員長が、高等学校初任教職員約100人を対象に「まもるいのち」を活用した研修を実施。ワークショップなどで理解を深めました。

園児が危ないと思う場所を考えて発表

大きな磁石を使ったマーキングで楽しく学ぶ子どもたち

教職員になったばかりの先生たちがグループワークに参加

## 「赤十字を応援！」プレゼント Ⓐ 中嶋悟さん・坪井翔 選手 （株）日本レースプロモーション

### スーパーフォーミュラのハイレベルなレースで日本中のファンを勇気づけたい！

#### 中嶋悟さんサイン入り色紙&大会プログラム*

*2020スーパーフォーミュラ選手権

**2** 名さまに

株式会社日本レースプロモーションの中嶋悟です 。

今年のスーパーフォーミュラは、コロナウイルスの影響を受けながらも無事８月に開幕を迎えることができました。皆様と直接触れ合う機会は減っていますが、変わらぬご声援をいただきありがとうございます。

スーパーフォーミュラは、1000分の1秒を争う熾烈（しれつ）なレースです。ぜひ、生のレースを観戦にいらしてください。これからも選手一同赤十字の活動を応援して参ります。

なかじま・さとる◎1953年２月23日生まれ、愛知県岡崎市出身。日本人初のF１フルタイムドライバー。現在は、TCS NAKAJIMA RACING監督、また株式会社日本レースプロモーションの会長を務める。

#### 坪井翔選手サイン入り色紙&大会プログラム*

**3** 名さまに

JMS P.MU/CERUMO・INGING所属の坪井翔です。9月に岡山国際サーキットで開催された第2戦で初優勝しました。スーパーフォーミュラは毎年5月の大会で選手グッズのオークションを開催、収益全額を熊本地震災害などに寄付いたしました。今は残念ながらサーキットでファンサービスができない状況が続きますが、コロナウイルスに負けず共に頑張りましょう。

つぼい・しょう◎1995年5月21日生まれ、埼玉県出身。2018年全日本F3選手権チャンピオンを獲得し、2019年からスーパーフォーミュラへ。世界に誇るトヨタ育成ドライバーの１人として活躍中。

※色紙には日赤シールが貼付されます。

## 「赤十字を応援！」プレゼント Ⓑ パートナー企業紹介 vol.8 山本屋総本家

### 名古屋名物「みそ煮込うどん」の生みの親が、全国の医療従事者へ“笑顔のエール”

献血受付会場にて、共に献血に協力している名古屋栄ライオンズクラブのメンバーと

大正14年、名古屋大須にて創業した「山本屋」は代々、味を守り抜き、名古屋名物と呼ばれるまでになりました。そんな山本屋総本家は、毎年、社員の献血協力を続けています。また、平成16年ごろより日赤への寄付を開始。災害救護・救援活動への寄付など、赤十字活動資金への協力も継続して行っています。

山本屋総本家の経営理念の一つである、「いつも笑顔で」の気持ちは、「笑う門には福来る」と同様に「笑いがあればいつでも健康でいられる」の意味もあります。しかし、コロナ禍の緊急事態宣言に伴い、ときに笑顔が消えそうになったことも。そんなとき、日ごろから応援してきた日赤の医療従事者たちが必死に新型コロナに立ち向かう姿に感動し、笑顔を取り戻すことができたそうです。山本屋総本家は、お客様や医療従事者だけでなく、社会全体を明るくしたいという思いで、長く愛され続ける商品と共に、笑顔を届けます。

#### みそ煮込うどん 詰め合わせ3食入り

**5** 名さまに

歯ごたえのあるうどんとコクのあるみそが特徴。山本屋総本家の看板商品です

※当選品は、合資会社山本屋から発送いたします。なお、当選品発送のために必要な個人情報は、「個人情報保護契約書」に基づき日本赤十字社から合資会社山本屋へ提供し、当選品発送のためにのみ使用いたします。

上記プレゼントⒶ希望者は、右記WEBサイトにてご応募ください。

インターネットアクセス

赤十字ニュース プレゼント 検索

www.jrc.or.jp/publication/news/

ここから応募できます

上記プレゼント希望者は、以下の項目を明記のうえ、郵送・FAX・WEBでご応募ください。①お名前 ②郵便番号・ご住所 ③電話番号 ④年齢 ⑤赤十字NEWS11月号を手にされた場所（例／献血ルーム） ⑥11月号に関するご意見・ご感想

郵送／〒105-8521 東京都港区芝大門 1-1-3
日本赤十字社 広報室 赤十字 NEWS11 月号プレゼント係
FAX／03-6679-0785 WEB応募／右の2次元バーコードからご応募ください。
11月30日（月）必着 ※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます

こちらから応募できます

令和2年11月1日（毎月1日発行） 第966号（昭和24年9月30日 第三種郵便物認可）

# WORLD NEWS

## 中南米での新型コロナウイルスへの対応

中南米には国境付近で足止めされている移民たちの大きなキャンプが複数ある（写真はコロンビア）

# コロナ禍で深刻さを増す移民問題 移民の人々の心に寄り添い続ける中南米の赤十字社

**北米など安住の地を目指す、数十万人の移民が「国境閉鎖」によって苦境に立たされています。コロナ禍と移民問題に直面する中南米の現状と現地での活動を伝えます。**

### 国境周辺に集まる移民たち 感染拡大につながる大きな懸念に

中南米における新型コロナウイルス感染者数は、ついに900万人を突破。世界各地の感染者数を比べると、上位10カ国の中に中南米のブラジル、アルゼンチン、コロンビア、ペルー、メキシコが含まれているという状況*1です。

これらの国々にはより安全で安心な暮らしを求めて北米を目指す移民も多く、数千人単位の人々が「キャラバン」と呼ばれる集団を作って国境を目指します。国境が閉鎖される中、コロンビアとベネズエラの国境地帯で感染者数が急増したという報告もあるなど、移民・難民の密集は大きなリスクが伴います。

*1 2020年10月14日時点

### 身動きが取れず、追い詰められる移民に「希望」を与える、赤十字の努力

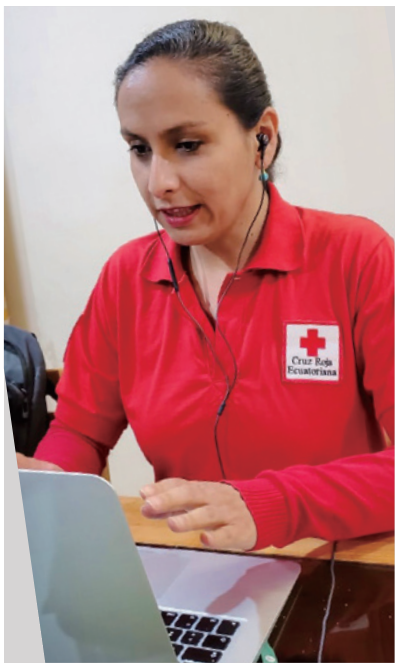
そんな状況の中、中南米の各国赤十字社は感染症対策を強化して移民に向けたサポートを継続。コロナ禍で国境が閉鎖され、身動きが取れなくなった移民たちのために赤十字ボランティアも数多く活躍しています。

南米大陸の北部にあるエクアドルも深刻な移民問題を抱える国の１つ。エクアドル赤十字社のボランティア、カーラさんは次のように語ります。

「国境閉鎖で身動きが取れなくなった移民たちは、かつてないほど厳しい状況に置かれています。彼らには水や食料だけでなく、感染防止策や治療体制も不足し、多くの不安やストレスを抱えているのです」

こうした実情を踏まえて、エクアドル赤十字社では移民への支援として食料や衛生キット、医薬品などの提供のほかに、「こころのケア」にも注力。人々が心のよりどころを持つことを重視し、携帯電話を使ったホットラインやリモート支援を行っています。「移民たちの不安な気持ちをくみ取り、話を聞くことで彼らの苦しみが少しでも癒やされるように、と活動しています。時には、離れ離れになった友人や家族と連絡を取る支援もしています」とカーラさん。同社の離散家族の連絡支援は４万件*2を超える実績があります。

*2 2018年以降


パソコンでリモート支援を行うカーラさん

新型コロナウイルスの感染拡大の影響は移民にも計り知れないほどの困難な状況をもたらしています。世界各地の赤十字・赤新月社は、彼らの気持ちに寄り添いながら人々が本当に必要とする支援を続けています。

## 数字で見えた！ 世界で生かされる皆さまのご支援

**世界中の災害や紛争から、人々の命と健康を守る日赤の国際活動。皆さまの寄付がどのように世界で役立てられているのかを、数字でわかりやすくお伝えします。**

### バングラデシュ南部避難民キャンプで、「こころのケア」を受けた人数

**8万1042人**

（2017年８月～2020年9月末までの延べ人数）

笑顔の練習をする「こころのケア」スタッフと、指導する日赤職員（2018年撮影）

皆様からのご寄付は、2017年８月に始まったバングラデシュ南部避難民への「こころのケア」にも生かされています。この活動は、日赤とデンマーク赤十字社が協力し、バングラデシュ赤新月社を支援する形で実施。訓練を受けた避難民ボランティアが、避難民の不安や悲しみに耳を傾けたり、困りごとの解決を手助けしたりしています。社会福祉・医療支援が必要な人を見つけた場合は、各機関へつなげることも。昨今の新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、バングラデシュ政府から避難民キャンプ内での活動は生命維持や生活に必要不可欠なものに限る、という制限が。そこで「こころのケア」と同時に感染予防策の普及を行うことで活動を継続。これにより、キャンプ内の感染拡大防止にも貢献し、避難民が抱いていた感染に対する不安も軽減しています。